

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1C3階廊下】

在日コリアンによる朝鮮語の「名詞的表現」に関して
—朝鮮学校コミュニティを中心に—

権 恩熙, 宇都木 昭

本発表では朝鮮学校コミュニティで話される「在日朝鮮語」の実態を究明すべく、彼らの「名詞的表現」の特徴を明らかにしたい。言語資料としては、朝鮮学校を扱っている映像作品と朝鮮学校の授業を用いている。

その結果、主語・目的語・修飾語・述語において名詞的表現の使用が確認された。特に注目に値するのは「名詞止め文」である。朝鮮学校コミュニティにおける名詞止め文は大きく①一般名詞、②感情名詞、③依存名詞、④疑問詞の四つで止められており、この中で②と④は日本人朝鮮語学習者には現れにくい、朝鮮学校コミュニティ特有のものと考えられる。

このように多様な名詞的表現が観察されることから、彼らの言語的思考のベースが日本語となっている可能性が高いことがわかる。ただ、朝鮮学校コミュニティ特有の名詞的表現もあり、それは彼らが「アイデンティティの獲得」と「非母語話者同士での会話」を目標に朝鮮語を学習しているからと考えられる。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1C3階廊下】

身体動作を伴う教授活動における通訳者の参与
—日本舞踊ワークショップにおける通訳, 講師, 参加者の相互行為—

安井 永子

本稿は、大学で留学生を対象に行われた日本舞踊ワークショップのビデオ録画データの相互行為分析を通して、身体動作が中心となる教授活動における通訳者の参与について明らかにすることを目的としている。用いたデータでは、日本語の堪能な留学生が、参加留学生のために日本語から英語への通訳を行っている。先行研究では、通訳者が話し手の発話を別の言語に置き換えるだけでなく、相互行為の一人の主体的な参与者として相互行為の進行に貢献することが示されている。本稿の分析からも、通訳学生が講師と参加学生の発話と身体動作を観察しつつ、それらに合わせて通訳としての役割に志向したり、その役割から外れて主体的に教授活動に関わったりすることが示された。言語でのやり取りを中心とする会話での通訳を扱った先行研究とは異なり、本稿では、通訳作業がどのように達成されるかは、身体動作が中心であるという活動の特徴が関係することも明らかにした。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1C3階廊下】

謝罪場面における「事情説明－応答」の連鎖
－日本語母語話者とタイ語母語話者を比較して－

ルンタンヤニティトーン チャナントーン

本研究では謝罪場面に見られる「事情説明－応答」の連鎖に注目し、日本語母語話者（JNS）同士とタイ語母語話者（TNS）同士の会話の特徴を明らかにすることを目的とし、金銭の返済に関するロールプレイ会話を用い、「事情説明－応答」の使用実態を分析した。その結果、両母語話者の謝罪する側は「金欠」、「財布を忘れた」などの理由で相手に事情を説明した。また、「事情説明－応答」の連鎖についてJNSは「事情説明－相づちのみ」の連鎖が多く見られたが、TNSは「事情説明－事情説明」の連鎖が多く見られた。さらに、「金欠」、「財布を忘れた」などの「事情説明」の内容が異なっても、JNSとTNS謝罪される側はそれぞれの応答に影響を与えないことが分かった。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1C3階廊下】

短期留学生の日常会話の相互行為分析
—対照的な人間関係を構築した学生を比較して—

長谷川 敦志

本発表では、短期留学生が日常会話で構築した相互行為の特徴的なパターンを分析する。研究対象として、二人のアメリカ人留学生に焦点を当てる。一人はプログラム中に多くの人との繋がりを求め、積極的に様々な活動に参加したローズ（仮称）、もう一人は数少ない限られた人間関係を好み、最終的に二人の友人としか日常的に関わることがなくなってしまったジョー（仮称）である。会話分析（CA）の枠組みで、二人の留学生がどのようなリソースを利用しながら相互行為に参加していたかを詳細に記述した。分析の結果、二人の相互行為の間には対照的なパターンが浮かび上がった。ローズの相互行為には、複数人会話、複数会話への同時参加、会話の分裂（schisming）などが多く見られた一方で、ジョーの相互行為の多くは、同一相手との一対一のトピック会話が主で、会話の相手によって、対象的なターン・話題展開が行われていることも浮き彫りになった。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1C3階廊下】

参加者にとって「よい話し合い」とは？
—話し合いにおける「参加感」と「参加行為」の関係—

中村 香苗, 宇佐美 洋, 嶋津 百代

本研究では、話し合いに参加した当事者のふり返りを通して、「よい話し合い」とは何かを再考する。まず、日本、中国、韓国からの学生を集め、毎回メンバーを替えて社会的なテーマで話し合いを3回行った。本研究では、3回目に同一グループになった3人の学生へのインタビューを通して、各学生がどのようなピリフを形成し、それが3回目の話し合いの評価にどう影響したのかを検証する。分析の結果、3人とも「結論を出すこと」と「参加できること」がよい話し合いの鍵となっていた。しかし、どのようなプロセスで結論に到るべきか、「話し合いに参加する」とは誰のどんな行為を指すのかという点で3人の認識に齟齬があり、それが話し合いの満足度に影響していることも明らかになった。この結果を踏まえ、話し合いの訓練において、いかに参加者の情緒的側面も考慮に入れた指導や評価をするべきか、今後さらに検討を重ねる必要があることが示唆された。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1C3階廊下】

自己表現力を育む自己PRの授業実践
—モデルアカデミーでの談話分析をデータとして—

渡慶次 りさ

本研究は、モデルアカデミーでの自己PRの授業実践を通して、アサーティブな自己表現力を育む自己PRの授業を構成することを目的としている。授業を通して、生徒はこれまでとは異なる複数の視点から自分を見て表現するという、新しい目を持つきっかけとなる。

自己PRの授業ではShow and Tellプログラムを活用し、生徒は自己評価と相互評価を行う。またフィードバック時に話し合いの時間を設ける。さらに自己PR文をジャンル分析し、フィードバック前後の変化を比較する。その後、評価基準、フィードバック方法を確立する。評価結果から、他者による評価に比べて自己評価が低いことや、授業後には自己評価・相互評価ともに評価が高くなったことが分かった。また生徒は、キーワードとなる言葉と具体的な理由を整理しながら展開し発表した。そして本研究により自己PRの授業に新しい価値を与え、自己PRを自己表現力が育まれる新しい分野として提示する。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1C3階廊下】

日本語とクメール語における勧誘会話の対照研究
—勧誘内容に関する交渉・相談を中心に—

Kuy Siemkiang

本稿では、ロールプレイにより、日本語母語話者(KNS)同士とクメール語母語話者(JNS)同士の勧誘会話を10組ずつ収集し、日本語とクメール語の勧誘会話における勧誘内容に関する交渉・相談の方法を明らかにすることを目的とする。ロールプレイは「二人での夕食に誘う」という場面を設定した。分析の結果、日本語の勧誘会話では、勧誘を承諾してから勧誘内容に関する相談を行う会話が多かった。食べ物や行き先に関しては勧誘者を、時間に関しては被勧誘者を優先して相談が行われた。また、相手に提案されたことが気に入らない場合は、間接的に不同意を伝えることで相手の代案を求め、お互いの希望を調整しようとする。一方、クメール語では、時間以外の勧誘内容は、ほとんどの会話で承諾を行う前に交渉する。交渉の際、一方を優先する方法を取らず、相手の提案を求めたりするが、その提案に対し気に入らない場合は、明確に不同意を伝えて交渉する方法を取っていた。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1C3階廊下】

医師国家試験に出現する特徴的な動詞の分析
—教育への応用を視野に—

山元 一晃

医師国家試験で用いられている動詞を対数尤度比に基づく特徴度により分析した結果について発表する。まず、医師国家試験6回分の形態素解析を行なった。さらに「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を対照コーパスとして特徴度を算出したところ、特徴度が有意に高く、かつ、頻度が5以上ある語が37語あった。それらの語を「日本語教育語彙表 Ver. 1.0」に対照したところ、32語が上級後半までに学習することがわかった。そのうち、28語は、中級後半までに分類されている。このことから、日本語教育の文脈に組み込める可能性が示唆される。また、各語は、主訴・所見を示すために使われる動詞、状況説明に使われる動詞などに分類できることも分かった。また、頻度5以上の特徴的な動詞のテキスト全体におけるカバー率は延べで58%であるが、特徴度が低い語のうち中級後半までに該当する語も含めると95%になることが分かった。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1C3階廊下】

日本人学部生によるインタビュー会話の比較分析
—印象評価・会話データ分析・フォローアップインタビューをもとに—

中井 陽子

本研究では、日本人学部生による2つのインタビューA, Bを比較分析し、インタビューを行う際のより良い聞き手とは何かを明らかにする。インタビューA, Bでは、それぞれ聞き手Aと聞き手Bが話し手の学生に部活について聞いた。この2つのインタビューA, Bを会話データとして、聞き手A, Bの印象評価を行ったところ、全ての評価項目（参加度・丁寧さ、質問内容、聞き手の反応の仕方、話題の繋げ方、事前準備、非言語行動等）で聞き手Aの方が評価が高かった。さらに、各インタビューの動画・文字化資料、および、フォローアップインタビューを分析した結果、適切なインタビューの仕方としては、話題を円滑に繋げて質問する表現、簡潔な質問の仕方、下調べと話し手を喜ばせるほめの発話や非言語行動による雰囲気作りが重要なことが分かった。こうした点を学部生・大学院生のアカデミックな活動の指導にも取り入れていくことが必要だと考える。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1 C 3階廊下】

会話に見られる沈黙の解釈の多義性
—語用実践行為として捉える沈黙—

種市 瑛

本研究は、沈黙に関する主要な先行研究における議論を概観した上で、沈黙を「語用実践行為」(Mey, 2001)として捉え、同一の沈黙に対する解釈の多義性について論じる。沈黙に関する主要な先行研究では、「言語行為論」や「ポライトネス理論」といった理論的枠組みを用い、沈黙を「話し手」の「意図」という視点から一義的に捉える傾向がある。それに対して本研究は、語用実践行為の観点から沈黙を相互行為の中でコンテキストにより状況づけられ、意味づけがなされる行為として捉えなおし、コミュニケーションの中で多義的に解釈され得ることを示す。発表では具体例をあげながら説明を加え、沈黙がどのように捉えられ、意味づけされるのかについて考察を行う。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1C3階廊下】

インタビューにおける成員カテゴリー化の実践
—日本語教師/元日本語教師へのインタビュー—

勝部 三奈子

本発表の目的は日本語学校の非常勤講師/元非常勤講師に対するインタビュー/フォーカス・グループの中における成員カテゴリー化(Sacks,1995)の実践に焦点を当て、日本語教師にまつわる職業カテゴリーが行為連鎖の中でどのように用いられ、どのような行為が達成されているかを明らかにすることである。そのため日本語学校の非常勤講師/元非常勤講師に対するインタビューのデータ中、「専任」や「非常勤」などの日本語教師にまつわる職業カテゴリーが用いられる場面を分析した。分析の結果、「専任」「非常勤」などのカテゴリーが用いられるのは、インタビューとは他のカテゴリーに属する人を説明する、評価するという行為の中であった。これらの行為はそのカテゴリーの特徴付けをすることによって行われ、そのことによって、現在の自らの属するカテゴリーを選択したのはなぜかという理由がインタビュアーやインタビューーにとって妥当なものとなっていた。

<<ポスター発表>> (3月17日 10:00-11:15)

【1 C 3階廊下】

LINE会話における日タイの依頼ストラテジー

—「対人配慮」の前置き表現に着目して—

サクンクルー カンスイニー

本研究では、LINE会話における日タイの依頼ストラテジーを明らかにするため、日タイ母語場面の友人同士によるLINEロールプレイ会話をデータ「対人配慮」の前置き表現に着目して分析した。その結果、日本語母語話者はタイ語母語話者より相手の都合を聞き、迷惑をかけることを詫げる目的で「対人配慮」の前置き表現を多く使用した。加えて、日本語母語話者は言語的要素である文字によるメッセージだけでなく、非言語的要素である絵文字、顔文字、記号を多く使用しているが、タイ語母語話者の使用はほとんど観察されなかった。以上の結果に基づき、非対面コミュニケーションであるLINEでは、話し手の意思や表情を伝え、相手への配慮を表すために言語的要素および非言語的要素が使用されたと考えられる。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

感動詞「あら」について
—1970年代・1980年代の使われ方に注目して—

加藤 恵梨

本研究の目的は、主に1970年代・1980年代において、感動詞「あら」がどのように使われているのかを明らかにすることである。先行研究では「あら」は主に女性が用い、「驚く声を表す」と記述されている。また、役割語の一種と考えられ、「女ことば」や「おネエことば」として用いられることもある。最近ではそのような使われ方をしていることが多いが、1970年代・1980年代の資料を見ると、様々な年齢層の女性が使い、「あら」は「驚く声」を表すだけでなく、「非難する気持ちを表す」「賞賛・歓喜の気持ちを表す」「疑問に感じる気持ちを表す」などといったように多様な使われ方をしていることが分かる。本研究では、NHKで放送された『中学生日記』や『現代日本語書き言葉均衡コーパス』をもとに、1970年代・1980年代に使われた「あら」が、どのような対象にどのような場面で用いられているのかを示し、「あら」の使われ方について明示する。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

「なんか」による話題開始についての一考察

若松 史恵

話題の開始に用いられる言語的要素に関する研究は多く行われているが、なぜそのような言語的要素が用いられているのかについては、まだ十分に明らかになっていない。本研究では、母語話者の発話冒頭に「なんか」が用いられている発話とその前接発話を分析の対象として、「なんか」が話題の展開にどのような役割を果たしているかを明らかにする。分析の結果、話題開始部では、前接する相手領域の発話に対して、「なんか」を用いて自分の経験、考えなどを語ることで、話者が会話の流れを相手領域から自分領域へと引き寄せている様子が見られた。自らの発話により自分領域へと会話の流れを変化させることは、相手に強引な印象を与える危険性も孕んでいるが、話題開始部に用いられる「なんか」は、そのような危険性を回避しつつ、相手領域から自分領域へと会話の流れを引き寄せて、自ら話題を開始する戦略として用いられていると考えられる。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

課題達成対話における協働行為とinclusive "we"
—英語を母語とする教師と英語学習者の非対称性に注目して—

谷村 緑, 吉田 悦子, 仲本 康一郎

Inclusive "we"は、話し手が聞き手に対して情報が共有されているかのように話すときに使用される (Halliday and Hasan 1976; Brown and Levinson 1987). 本稿では、レゴブロックを使用した二者の課題達成課題においてinclusive "we"がどのように使用されるのかを明らかにする。特に、非対称性に焦点をあて、英語話者教師と日本人英語学習者による課題達成過程に注目する。比較対象としては、英語話者ペアのデータを利用する。

結果、まず、英語話者教師-学習者ペアは、英語話者ペアよりも"we"を多く使用することが示された。2点目に、指示者と作業者の"we"の使用割合が、英語話者ペアではおよそ均等であるのに対し、英語話者教師-学習者ペアでは、英語話者教師に大きく偏っていることが示された。3点目に、英語話者教師-学習者ペアの場合、教師は協調的に作業がなされていることを、ブロックを積む各段階で強調するために"we"を多用することが示された。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

知的障害者向けのわかりやすい情報の応用可能性に関する予備的検討
—留学生・聴覚障害を有する学生等を対象に—

打浪 文子, 大淵 裕美

本研究は、知的障害者を中心とした言語的に弱い立場にあるさまざまな人々に対する、わかりやすい日本語による情報保障の連携や応用可能性を検討することを目指すものである。本発表では、知的障害者が編集委員となって編集・製作に参加した情報媒体（全日本手をつなぐ育成会刊「ステージ」）を用いて、知的障害者向けのわかりやすい情報が留学生や聴覚障害学生等の多様な言語的背景を有する人々にとって有効かどうか、および彼らのわかりやすい情報へのニーズや意識の相違を明らかにした。

「ステージ」を用いたアンケート調査では、ほぼ全ての項目において80%以上の日本人学生・留学生が「とてもわかりやすい」「どちらかというわかりやすい」と回答した。また、一方、わかりやすい情報に関するニーズは、クロス表分析の結果、日本人学生（聴覚障害学生含む）と留学生で有意差が見られた。インタビュー調査もこれらを裏付ける結果となった。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1 C 3階廊下】

LINEによるコミュニケーション
—文字を伴ったスタンプに注目して—

服部 圭子, 岡本 能里子

総務省統計局の調査（2018）では、LINEの国内月間アクティブユーザーは7300人だと報告されている。LINEによるコミュニケーションの実態解明に向けた研究は様々あるが（西川・中村:2015, 須田他2016他）, マルチモダリティに注目する視点（Kress & van Leeuwen 1996）からの研究はまだ少ない。申請者らはこれまで、LINEにおける相互行為を「ビジュアルコミュニケーション」として捉え、その中でも新しい機能であるスタンプに注目して研究を行ってきた。本発表では、LINEコミュニケーションにおいてスタンプ、特に文字を伴ったスタンプがどのように用いられているのか、その機能を明らかにすることを目的とする。データは、2012年9月～2018年9月に申請者らがやりとりしたLINEメッセージを対象とし、Goffman（1981）のParticipation Framework等の観点から分析する。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

日本語におけるジェンダー表現の一考察
—「女性」「男性」のコロケーションを中心に—

馬 雯雯

本研究はテキスト型データを統計的に分析するためのソフトウェアKH Coderを用い、計量テキスト分析の手法で『朝日新聞』の記事データベース（聞蔵Ⅱビジュアル）の1984, 1994, 2004, 2014の新聞記事を調査資料とし、「女性」「男性」とそのコロケーションから日本語におけるジェンダー表現の特徴を考察するものである。考察に際し、「女性」「男性」と形容詞のコロケーションならびに「女性」「男性」と名詞のコロケーションを対象とした。分析結果から、新聞記事においては、女性の方が男性より性質や様子の描写がなされやすい傾向があること、「若い」と「女性」「男性」の共起は通時的にも変わらないこと、「若い女性」「若い男性」は定着度の高いカテゴリーとして認識されていることが確認された。また、「女性」の直後に人名詞がよく共起しているだけでなく、「男性」の直後にも人名詞がよく共起していることが明らかにされた。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

日本とインドネシアの禁止サインの語用論的分析
—金沢市とバンドン市におけるパイロット調査—

ムティ アフィファー

本調査は看板・標識によるコミュニケーションの中の禁止の看板・標識（以降、禁止サインと呼ぶ）に焦点を当てる。禁止という行為は相手の行動を制約するものであるため、語用論的に考えると、相手のフェイスを脅かす可能性が非常に高い。それによって、禁止サインにも、設置場所によって使用されている禁止表現も異なってくると考えることができる。また、言語と文化的背景が異なる日本とインドネシアでは、対応する禁止サインの言語表現の用法に違いがあるはずである。

分析の結果、禁止サインの設置者と禁止サインの読み手との間に想定される社会的距離や支配力が異なるため、使用される禁止表現が異なる傾向が見られた。更に、同じ場所でも、禁止される内容によって、相手への負担の度合いが異なるため、使用されている禁止サインの表現も左右される傾向が見られた。また、金沢市とバンドン市の対応する禁止サインの表現方法にも異なる傾向が確認できた。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

教育活動に対するリアルタイムアノテーションの特徴と振り返りにおける効果分析
—小学校におけるプレゼンテーション発表会を例にして—

山口 昌也, 森 篤嗣

筆者らは、プレゼンテーション練習などの協同型の教育活動を学習者が観察するための支援システム FishWatchr Miniを、小学校・社会科の授業のプレゼンテーション発表会に適用した。児童は「いいな。」「もっと知りたい!」と思ったシーンにFishWatchr Miniでリアルタイムにアノテーションし、その集計結果を用いて発表後に全員で振り返りを行った。本研究では、児童が行ったアノテーションの特徴を明らかにするとともに、振り返りにおける効果を定性的に分析する。アノテーションの特徴分析は、アノテーションが集中するシーンを調査することにより行い、「いいな。」「もっと知りたい!」ごとに3種類のシーンに分類した。さらに、教師が振り返り時に提示するシーンの選択にアノテーション結果の特徴を活用する方法、教師と児童のアノテーションとの差異を用いて振り返りに活用する方法などの効果を議論する。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

不同意表明に伴う手の動きの日中比較
—機能分析のための枠組みの提案—

趙 東玲

言語行動とともに、人々は身体の動きによっても情報伝達をしている。例えば、中国人は、親指と人差し指で円を作り、手の平を相手に向けることによって「OKサイン」を表し、日本人は、同じ形の手の平を上にするによって「お金」を表している。このような表象的な働きをする身体の動きは日常会話の中で頻出する。身体の動きはこのような表象的な特徴のほか、言語的感情の表出を繰返したり、強調したりする機能を有しているものもある。趙(2018b)は相手に対する不同意が言語で表明される際、どのような形の手の動きが伴い、それらはどの程度の不同意を示しているのかについて考察した。その結果、中国語母語話者は、「指す」・「置く」・「叩く」・「動かす」といった4種の手の動きによって補助的に不同意の態度を伝えていることが分かった。しかし、これらの手の動きの機能は適切に分析されていない。本研究では機能を細分化して分析する枠組みを提案する。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

漫才対話の「テンポの良さ」を支える発話リズムの同期・変調パターン

本井 佑衣, 岡本 雅史

本研究の目的は、漫才対話における発話リズムが二人の演者間でどのように生成され、変調されているのかを分析することで、個々の話者を越えた「対話のリズム」の発生パターンを解明することにある。結論として、(1)先行話者の発話リズムが後続話者に継承され同期すること、(2)モーラのリズムユニットがある一定のパターンを示すこと、の両者によって「対話のリズム」がテンポの良さへと昇華されることを示す。本研究では、坂本ら(2006)が行った、一発話内にどれだけの時間がかかったかを示す発話のリズム表を参考にして漫才内の発話リズムを計測した。分析の結果、テンポが良いと捉えられる漫才対話では、先行話者の作る、ある一定のモーラのリズムに次話者が合わせようとする動きが顕著に見られた。さらに、漫才内容を楽譜に書き起こした際に、一小節内に入る発話の語の数が七五調に則っている可能性も認められた。

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

言語習得はどこまで社会的か？
—社会学習とCDS研究のメタ分析から迫る言語習得の姿—

吉川 正人

本発表では、「社会学習」として言語習得をとらえる研究と、それらの研究とは矛盾するように思える研究成果、およびその関連で、言語習得にとって極めて重要な役割を果たすとされるCDSに関する研究成果を総括することで、言語習得の社会性について考察する。

結論は以下のとおりである：

1. 音素の区別を習得するには社会的学習が必要とされているが、それを断定できるほどの証拠が得られているとは言えない
2. 言語習得の社会性を示す根拠として、動画を見るだけでは習得が不可能であるという議論があるが、それと矛盾する研究成果もあり、社会的要因が不可欠とは断定できない
3. 社会的要因が言語習得に有効であるのは、周囲の大人が幼児に話しかける際の特有の話し方 (CDS) が幼児の注意を引くからであり、社会的要因そのものが重要なわけではない

<<ポスター発表>> (3月17日 11:15-12:30)

【1C3階廊下】

会話力を向上させる聞き手のストラテジーとは
—実際の雑誌インタビューの観察・分析から—

大塚 明子

本研究では、自然会話のなかでナラティブ（個人の内面に踏み込んだ話）を引き出すストラテジーを明らかにするために、雑誌に掲載するために行われたインタビューの言語行為を詳細に分析・観察した。その結果、以下の会話ストラテジーが抽出された。（1）反射的あいづちによる共感アピール、（2）褒め+スピーチレベルのシフト、（3）不完全な発話によるレジリエンス効果、（4）常套句を回避し本音を引き出す、（5）疑いや否定など強い刺激で詳細を引き出す、（6）発言の先取りによる強い共感アピール（7）インタビュアーの自己開示、である。インタビューには、既に明らかにされている会話ストラテジーのほかに、その場の必要性によって生じたストラテジーがあった。友好的な関係を維持しながらナラティブを引き出すという課題をクリアしているという点で、実際の対面的言語コミュニケーションにおいても活用する方向を探っていきたい。